

読売歌壇

小池 光選

割りばしに菓子折りの紐くくりつけ幼子は舞ふ
新体操を

【評】お孫さんだらう、いくつくらいか。テレビで新体操を見て、その真似をする。割り箸と菓子折りの紐と、これ以上なく具体的に言ったところがおもしろい。かわいもの。一粒を含めて思うとき思ふ幼時どうを「どぶ」と言ひしを

【評】親より先に逝ったわが子をしのぶ。おさないとき「どぶ」と言えず、「どぶ」と言っていた。かわい盛りだった。あれから幾年過ぎたか。

小三のわれ教室でヨイトマケの唄をうたへば鬼の師も泣けり

【評】おっかない先生だった、あるとき教室でわたしがヨイトマケの唄を歌ったとき、涙をこぼした。いい先生だったのだ。

栗の実がイガからちよっぴり顔をだし「秋ですな」とほほ笑んでいる 東大阪市 池中 健一

まじまじとつづくと見る白内障術後の眼に憂鬱の鬱

おじいさんが高枝バサミで柿落とすナイスキャッチのおはあさんの顔 東京都 かしむら洋子

大銀杏結べる巨漢ら追還す墨堤ならずテムズ河畔を

問われるたび「江戸の江です」と生真面目に答えていた友 雪江と言う名の小樽市 石田ちづる

看病にきた娘が帰る淋しいよカップラーメン食べて寝ちゃおう 札幌市 小森 雅夫

制服のサイズ合わせに明日行くあたらしい日々きつと楽しい

鳴門市 楠井 花乃

栗木 京子選

立ち寄ればバイトの孫は休みといふキツネうでんで温まる秋

【評】孫が飲食店で働く姿を見たくて、連絡なしで立ち寄ったのであろう。会えなかったものの、店の雰囲気にあたかさを感じた。「キツネうどん」の具が効いている。古希過ぎて米寿間近の恩師の山の草刈りするはこれも幸せ

【評】山林の管理をするのは大変なこと。恩師のためとはいえ、作者も七十歳を過ぎた身である。それでも「これも幸せ」と軽やかに収めた結句に拍手を送りたくなった。

豊だらけの昔の家を見せたいと孫は連れ来る三人の友

【評】豊の部屋が全くない家が増えた。孫の友人にとって「豊だらけ」の家は昔話に出てくる住居そのもの。場面が目につく一首。移住者の増えたふるさとの秋祭りラップバトルの勝者に松茸

上澄みの良いところだけ取り送信を押すグループライン 上越市 吉村恵美子

交通整理の区会議員と立ち話女性総理活躍は雲の上の話 東京都 青山 繁

定型を持たない水が雨になり駐輪場でサドルを濡らす

お互いが持つゼロファンを重ねても綺麗な色にはならなくて、でも 岩倉市 古橋 紗弓

平積みの本と目が合う「開いて」と頁が呼吸をしたがっている 東京都 岡本万寿子

パエリアも餃子もキムチもおいしくて我が家の食卓国境はなし

つくばみらい市 古谷 秀子

俵 万智選

届くの三日かかったその文字の重さをそっと手のひらに置く

【評】メールやLINEなら一瞬で届く時代、手紙の文字は三日かかってやってくる。書いて、封をして、投函して、届けられて、開封される……その時間に思いをはせることは、とても豊かな。

母さんはキャッチボールで父さんはドッジボールの我が家の会話

【評】キャッチボールはよく聞くが、父はなんとドッジボール。シンプルな比喩の面白さそのままに、シンプルに表現したところがいい。

遊郭の跡地に校舎その跡地に百貨店なり冬の昼月

【評】時代とともに移り変わる土地の用途。遊郭、校舎、百貨店という具象が効いている。薄くとも変わらぬ月との対比が余韻を残す。切り分けた季節のケーキはこのところ夏と冬とがかなり大きめ

うな秋晴れたつた 千葉市 小金森まさ

いつの間にか帰るゆきたる子燕軒先あたりにこるのまぼろし

道に子がチョークで描くその円のそこしかな

い平和を思う 守口市 小杉なんぎん

デート中献血したり洗車する君の縄張りに入れたい気分

足利市 坂庭 悦子

掌のなかで聴診器の口あたためたためて老医師は聴く胎児の鼓動

伊印市 塩田 幸子

ひと月も厨に立てばさまになり驚くかなれ煮物が出来る

岐阜市 後藤 進

黒瀬 珂瀾選

テンプルで餃子を包むばあちゃん客が来るたび「らっしやい」と立つ

【評】このおばあちゃんの手作り餃子が名物の町中華なのでしょう。仕込みをしながらお客に対応する、テキパキした姿が目につかびます。小さなお店の温かさを感じる一首。カフェインレスみたいな愛だ触れ方を忘れて冬に着膨れてゆく

【評】もうお互いに鋭い刺激は感じなくなつた段階の恋愛。以前みたいに頻りに触れ合わなくなつた、まったりした関係性なのではないか。着膨れた恋とは、面白い表現です。

玉碎の言葉初めて使はれし北の小島に四季ぞあれかし

【評】昭和18年5月のアリュシアン列島、アツツ島の戦い。約2500名の日本軍守備隊が全滅。戦争の記憶が静かに時を超える。李香蘭の歌聞きながら昼寝する満州はるか吾が夢の中

流山市 角田 勇

還るべき土を奪われアスファルトの上を彷徨う銀杏黄葉は

春日部市 宮代 康志

斎場へ亡き義姉乗せて向かう道りんごは赤くたわに実る

調布市 高坂 愛子

凸凹の三和土に立ちて九十は魔女のごとくにカレを混せる

浜松市 久野 茂樹

賞状は八〇二〇讀へての歯医者で頂くA三サイズ

あきる野市 大西 国子

転動に方言の不安覚えしも身を置きて知るそのあたたかさ

茅ヶ崎市 山本 和義

定休の前に配ったカップ麺この食堂へ寄付は絶えない

群馬県 金子 歩美